

BUDŌ

NEWS

今月のニュース

男女5階級の個人組手を初開催 第1回全日本空手道体重別選手権大会

第1回全日本空手道体重別選手権大会

主催:公益財団法人 全日本空手道連盟



池田刻斗
(67^{kg}級 優勝)



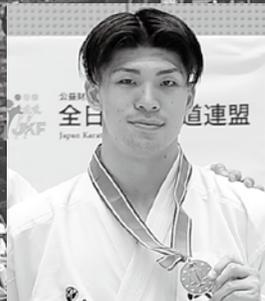
橋本大夢
(60^{kg}級 優勝)



中村しおり
(55^{kg}級 優勝)



宮原美穂
(50^{kg}級 優勝)



嶋田力斗
(84^{kg}級 優勝)



片岡大樹
(75^{kg}級 優勝)



澤島さくら
(68^{kg}級 優勝)



千葉満利愛
(61^{kg}級 優勝)

第1回全日本空手道体重別選手権大会

国際基準の個人組手体重別大会を初めて開催



女子 68キ_ロ超級

澤江優月
判定勝ちで優勝



男子 84キ_ロ超級

鈴木晃成
逆転で優勝

この大会は、東京オリンピックのレガシー大会と位置付けられ、男女の個人組手を国際大会と同じ5階級で行うことが最大の特徴。体重別で実施することにより、多くの選手に大会出場の機会を与えて日本人選手全体の競技力の底上げを目指す。

男子84キ_ロ超級では、鈴木晃成（東北地区）が決勝で吉村郁哉（東海地区）と対戦し、終了間際に上段突きを決めて逆転勝ちした。女子68キ_ロ超級決勝では、澤江優月（関東地区）と植草歩（全空連推薦）が対戦し、判定により澤江が接戦をものにした。

新設された個人組手の全日本空手道体重別選手権大会（主催Ⅱ全日本空手道連盟）が6月11・12日、群馬県・高崎アリーナで開催された。



会場となった高崎アリーナ



67*₀級・決勝=池田(左)の鮮やかな上段突き



60*₀級・決勝=橋本(左)が上段突きを決める

大会は、各地区協議会や競技団体(高体連・学生連盟・実業団)より選出された選手によって競われた。試合時間は3分。予選は総当たり戦を実施し、上位4名が決勝トーナメントに進出した。

男子の部(6月12日)

■60*₀級(24名)

18年世界選手権60*₀級銀メダルの佐合尚人(関東地区)は予選敗退。決勝は佐合に勝利した橋本大夢(全空連推薦)と伊東大希(北信越地区)の対戦。

橋本が上段突きで先制する。その後上段突きを決めて4-0としポイント差を広げた。ここから伊東が上段、中段と突きを決めて4-4の同点に追いつくものの、ここで試合は終了。先取の差で橋本が伊藤を降し、60*₀級の初代王者に輝いた。

●60*₀級優勝II橋本大夢(全空連推薦・天理大学)

「自分のやってきたことを信じて戦いました。自分一人で勝ち取った優勝ではありません。親やチームメイトだったり、周りの方々に支えられ

て取れた金メダルです。やっと恩返しができたかなと思います」

■67*₀級(24名)

21年インターハイ準優勝で大阪・浪速高校3年の池田刻斗(全空連推薦)と20年全日本選手権3位の北代涼馬(九州地区)の決勝。

中盤で池田が上段突きを決める。その後も池田は上段突きを次々に決めて4-0で快勝した。

●67*₀級優勝II池田刻斗(全空連推薦・浪速高校)

「自分は高校生なので思い切りいくことだけを考えました。優勝できてよかったです。次のインターハイでも個人・団体とも優勝を目指したいと思います」

■75*₀級(23名)

決勝は帝京大学2年の片岡大樹(関東地区)と東京五輪後初の大会となる西村拳(九州地区)が対決。

開始40秒で、片岡が鮮やかな上段蹴りを決めて3ポイントを先制し、優位に立つ。残り20秒、焦る西村は上段を強打しカテゴリー1(負傷につながる禁止行為)の累積で反則を



75kg級・決勝=片岡(右)が上段突きで攻める



84kg級・決勝=嶋田(左)が中段蹴りを繰り出す

宣告される。片岡が大本命の西村を破り、栄冠を勝ち取った。

●75kg級優勝Ⅱ片岡大樹(関東地区・帝京大学)

「決勝では西村選手と対戦することとなり、何がなんでも点を取ろうと臨みました。最初に決めた裏回し蹴りは満足しています。日本のトップ選手に決めることができ自信に

なりました。しかし、自分から行って返された際に重いパンチを食らいまだまだ課題があります」

■84kg級(21名)

21年アジアシニア選手権2位の嶋田力斗(関東地区)は予選で20・21年の全日本選手権覇者の崎山優成(全空連推薦)に4-1で勝利し、

決勝へと進んだ。21年世界選手権3位の森優太(関東地区)と対戦。

森が上段突きで先制するも、嶋田は上段突きを重ねて3-1で逆転。しかし、終了間際に森が中段蹴りを決めて再び優位に立った。終了の寸前、嶋田が上段突きを決めて再度の逆転。ここで試合終了となり嶋田が劇的な勝利を収めた。

●84kg級優勝Ⅱ嶋田力斗(関東地区・東翔)

「決勝の残り1秒の時は、負けている側なので、行くしかない前に進みました。それが結果に繋がったと思います。今回初めての体重別ということで絶対に勝ちたいと思いました。1回目の大会ということで、コンディション調整など、どの選手も揃っていないところがあったかと思

好評発売中!

空手は沖繩で発祥し、日本本土に伝承され、世界のKARATEとなった。その歴史と技法を、共同執筆で紐解く。空手の真髄に迫る白眉の二冊。

空手道 その歴史と技法

小山正辰 和田光二 嘉手苺徹 著



四六判・上製・568頁・定価2,640円

◎ご注文・お問い合わせ◎

(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
<https://www.nipponbudokan.or.jp>



84* 超級・決勝=鈴木(上)が上段突きで一本を取った

います。自分は初戦ではあまり良くなかったのですが、試合を重ねるたびにパフォーマンスも上がってきたと思います。そのままの流れで優勝できたのかなと思います」

■84* 超級 (21名)

21年全日本選手権優勝の鈴木晃成(東北地区)は決勝で吉村郁哉(東海地区)と対戦。

残り32秒で吉村が上段突きで先制するも、鈴木が崩れた吉村へ上段突きで一本を取って3-1でリードした。負けじと吉村も上段突きで有効を重ねて3-3とし、先取の差で優

位に立った。残り1秒で鈴木が上段突きで1ポイント獲得して逆転。鈴木が4-3で接戦をものにした。

◎84* 超級優勝II鈴木晃成(東北地区・帝京大学)

「決勝は大きな技で(ポイントを)いきなり取れましたが、自分としては細かい技で取っていき、その中で大きな技を決めたいと思います。初代王者になれて嬉しいです。今回は自分を出し切ることを考えていました。試合では自分の組み手が出せましたが、課題は残ります。今年は帝京大学の学生選手権4冠を目指したいです」

女子の部 (6月11日)

■50キ級 (17名)

18・21年の世界選手権連覇の宮原美穂(九州地区)が予選から実力差を見せて決勝まで勝ち上がった。対戦相手は福井高校2年の大田花希(高体連)。春の全国高校選抜大会(代替大会)の個人組手48キ級で優勝している。



50キ級・決勝=宮原(左)の中段蹴り

宮原は序盤に中段突きで先制されるも、上段突きと中段蹴りを次々に決めて7-3で圧勝。宮原が50キ級の初代女王となった。

●50キ級優勝II宮原美穂(九州地区・帝京大学職員)

「ホッとした気持ちです。体重別だと同じ階級の選手と試合できるので、それもいいなと思いました。この大会に向けては、いつも通りの練習を行い、試合では自分らしく前へ出る

■55キ級 (24名)

ことを意識しました。今回は優勝よりも、圧倒的に勝つことが目的だったのですが、ポイントを取られてしまいました。でも高校生と試合するのも新鮮で楽しかったです」

めて逆転。中村が3-1で黒田を退けて優勝した。

●55キ級優勝II中村しおり(全空連推薦・エス・ピー・ネットワーク)

「ホッとしました。55キ級はみんなスピードがあり、魅力的な試合になったのかなと思います。アジア大会出場に向けて頑張りたいと思います。私は(体重別で行われる)国際大会によく出ているので、いつも通りの試合ができました」



55キ級・決勝=中村(右)が上段突きで勝利

我が空手人生

国際松濤館空手道連盟宗家

金澤弘和 著

生いたちから父母の教え、「からて」との出会い、拓殖大学空手部に始まる厳しい修行時代、全国制覇、海外への普及、国際松濤館設立、独自の空手理論構築まで、空手に生涯を懸けた男の魂の記録。



四六判上製372頁
定価2640円

◎ご注文・お問い合わせ◎

(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
<https://www.nipponbudokan.or.jp>



61キ級・決勝=千葉(右)が残り2秒で上段突きを決める

■61キ級(24名)

横浜創学館高校3年の千葉満利愛(全空連推薦)は、予選で崎山凜(高体連)に敗れたものの、他の試合はすべて勝利して決勝に進出した。対するは静岡・御殿場西高校3年の齋藤綺良理(全空連推薦)で高校生対決となった。

残り1分、千葉が中段突きで先制し、残り10秒でさらに上段突きを決めて2-0。試合を決めたかに見えるが、先に繰り出されていた齋藤の中段蹴りがVR判定によって技ありと認められ、2-2と迫る。しかし

残り2秒で千葉が上段突きを決めて差を広げた。ここで試合は終了し、千葉が3-2で勝利し、高校生対決を制した。

●61キ級優勝II千葉満利愛(全空連推薦・横浜創学館高校)

「優勝できて嬉しいです。そして初めて体重別は新鮮でした。新たに導入された『カラテ・スタッツ』は見る側の人たちだけでなく、私たち選手側も自分のどの技がどれだけ入っているかが足りないのかが分かり、参考になると思います。これをきっかけに空手をもっと盛り上げたいと思います」



68^キ級・決勝=澤江（左）と植草の激しい攻防



68^キ級・決勝=澤島（左）が上段突きを決める

■68^キ級（17名）

決勝は帝京大学の澤島さくら（近畿地区）と御殿場西高校の橋本鈴江（高体連）の対戦。澤島が先制した後、再び澤島が的確にポイントを奪い3―1とリードを広げる。終了間際に橋本が上段突きを決め、残り2秒で上段蹴りを狙うが試合終了。澤島が3―2で逃げ切って勝利した。

●68^キ級優勝Ⅱ澤島さくら（近畿地区・帝京大学）

「優勝した実感がありませんが、嬉しいです。初めての体重別ですが、ずっとこの階級でやってきましたので、気楽に楽しんでできたかなと思います。日本で（体重別を）開催するのがすごいなと思いました」

■68^キ超級（9名）

決勝は、20年全日本選手権者の澤江優月（関東地区）とオリンピックの植草歩（全空連推薦）による実力者同士のカードとなった。

残り1分で、植草が中段突きを決めて貴重な先取を奪取した。残り13秒で澤江も中段突きを決め1―1となるが、先取によって植草の優位は

変わらない。果敢に攻める澤江。一方、逃げ切ろうとする植草に残り4秒で反則が与えられ、先取が取り消された。そのまま3分は終了し、1―1の同点のまま勝敗は旗判定に。澤江が判定4―1で勝利し、植草を破って記念すべき初代チャンピオンに輝いた。

●68^キ超級優勝Ⅱ澤江優月（関東地区・帝京大学）

「第1回の記念すべき大会で優勝できて素直に嬉しいです。決勝は、（中段突きで）先取を綺麗に取られましたが、焦ることなく、その後に『自分の技で一つずつ取ろう』と臨みました。その後、すぐに取れたので、よくできたのかなと思います。判定となりましたが、決まるまで自分でもどうなるか分からず『旗が』上がればいいな」と判定を待ちました。上がって良かったです（笑）」



■「カラテ・スタッツ」をユーチューブ上で初めて試行

大会の様子はユーチューブでライブ配信され、その中で各種データを活用して試合の状況を一目でわかるようにした「カラテ・スタッツ」という世界初の試みも行われた。試合中は攻撃回数、試合後は技ごとのポイント有効率などを表示した。



試合後、ユーチューブに表示された「カラテ・スタッツ」の画面。上段突き（上から2段目）は、技回数が左15回と右10回、ポイント有効率は左が27%であることを示している

大会結果

【男子】

- ▷ 60^{kg}級 優勝＝橋本大夢（全空連推薦・天理大学）、2位＝伊東大希（北信越地区・近畿大学）、3位＝内野翔太（全空連推薦・帝京大学）片岡光基（四国地区・国士舘大学）
- ▷ 67^{kg}級 優勝＝池田刻斗（全空連推薦・浪速高校）、2位＝北代涼馬（九州地区・近畿大学工学部）、3位＝村上洋斗（全空連推薦・近畿大学）谷口涼太（中国地区・近畿大学）
- ▷ 75^{kg}級 優勝＝片岡大樹（関東地区・帝京大学）、2位＝西村拳（九州地区・チャンプ）、3位＝高橋慶大（東北地区・帝京大学）西村悠一郎（四国地区・高松中央高校）
- ▷ 84^{kg}級 優勝＝嶋田力斗（関東地区・東翔）、2位＝森優太（関東地区・豊鉄筋）、3位＝今出仁（高体連・小松大谷高校）岩本遼（全空連推薦・慶應義塾大学）
- ▷ 84^{kg}超級 優勝＝鈴木晃成（東北地区・帝京大学）、2位＝吉村郁哉（東海地区・京都産業大学）、3位＝中谷永吉（東海地区・帝京大学）角川滉寿（全空連推薦・博多高校）

【女子】

- ▷ 50^{kg}級 優勝＝宮原美穂（九州地区・帝京大学職員）、2位＝大田花希（高体連・福井工業大学附属福井高校）、3位＝野島蓮（関東地区・拓殖大学）田畑梨花（近畿地区・京都産業大学）
- ▷ 55^{kg}級 優勝＝中村しおり（全空連推薦・エス・ピー・ネットワーク）、2位＝黒田愛乃（全空連推薦・東大阪大学敬愛高校）、3位＝島愛梨（近畿地区・帝京大学）藤田りり（近畿地区・近畿大学）
- ▷ 61^{kg}級 優勝＝千葉満利愛（全空連推薦・横浜創学館高校）、斎藤綺良理（全空連推薦・御殿場西高校）、第3位＝角豊実（東海地区・東大阪大学敬愛高校）、山本文香（近畿地区・京都産業大学）
- ▷ 68^{kg}級 優勝＝澤島さくら（近畿地区・帝京大学）、2位＝橋本鈴江（高体連・御殿場西高校）、3位＝広瀬空（東海地区・済美高校）若林美海（中国地区・中京学院大学）
- ▷ 68^{kg}超級 優勝＝澤江優月（関東地区・帝京大学）、2位＝植草歩（全空連推薦）、3位＝菊池瑞希（東海地区・関東シモハナ物流）寺澤紗良（東海地区・中部学院大学）

■東京五輪銅メダリスト 荒賀龍太郎選手が現役引退

大会2日目の12日、東京五輪男子組手75^{kg}超級の銅メダリストで16年世界選手権優勝、全日本選手権5度優勝の荒賀龍太郎さんⅡ写真Ⅱの引退セレモニーが同会場で行われた。

荒賀さんは「日本代表として15年間世界で戦い、世界一にもなり、最後はオリンピックの舞台に立つて戦い抜きました。その時の日本中からの応援は大変な励みになりました。人生をかけて勝負して見られた世界一という景色は、今でも忘れられません。これから選手たちも最高の景色を見られるよう、勝負し続けてほしいと思います」と後輩にメッセージを送った。

